Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

特集

発掘された日本列島 2017 地域展

〝速報〟四谷一丁目遺跡

―麹生産にみる江戸・東京―

東京都埋蔵文化財センター報 109

特集

発掘された日本列島 2017　地域展

“速報”四谷一丁目遺跡

―麹生産にみる江戸・東京―

特集にあたって

今号では、江戸東京博物館で開催される企画展「発掘された日本列島 2017 地域展　“速報”四谷一丁目遺跡 ― 麹生産にみる江戸・東京―」（会期：平成 29 年 6 月 3 日～ 7 月 23 日）をとりあげます。

独立行政法人都市再生機構によるＪＲ四ツ谷駅前の市街地再開発事業にともない、東京都埋蔵文化財センターでは１万６千平方メートルを対象に、平成 29 年１月まで２年にわたる大規模な発掘調査を行いました。町屋敷のほぼ全域を含む複数の町を同時に調査し、具体的な江戸の町のありかたを探ることができる調査として注目されました。まだ整理作業は始まったばかりですが、いちはやく遺跡の情報を伝えたいと、江戸東京博物館とともに「麹室」を中心とした速報展示を企画しました。これを機に、東京にまだまだ眠る江戸東京の文化財への理解を深めていただければ幸いです。

Ⅰ．四谷大発掘！　―よみがえる江戸の町屋敷―

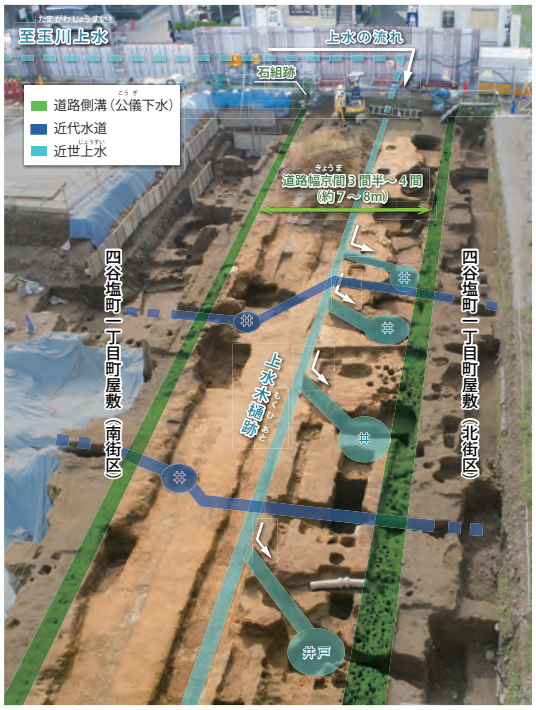
新宿区四谷一丁目遺跡は、JR 四ツ谷駅すぐの外堀沿いに位置します。６次にあたる今回の調査地は、1636 年（寛永 13）の江戸城外堀普請前後に起立した旧四谷塩町一丁目のほぼ全域と麹町十一丁目・同十二丁目の３つの町屋敷にまたがります。

遺跡からは、外堀普請に伴う造成工事によって現在の町並みの原形が築かれたことがわかりました。また、町を貫く道の両側に公儀下水の側溝を携え、通りに面した南北の両側町に木枠組の地下室が並び、建物跡、溝や堀の境界施設、上下水施設、ごみ穴、鍛冶跡、麹室群など多くの遺構が検出されました。４千箱を越える膨大な遺物のなかには、町での暮らしや生業、商品流通を窺わせる墨書資料も見つかっています（4～7）。

町に関わる近世史料が多く残されているのも特徴的で、江戸東京博物館だけでも江戸中期の沽券絵図（3）、幕末から明治初頭までの人別帳などの四谷塩町一丁目関連文書が所蔵されています。考古学的調査と史料の両成果を通じて、四谷の町並みや暮らしのようすを具体的に探ることのできる、たいへん意義深い町屋調査といえるでしょう。

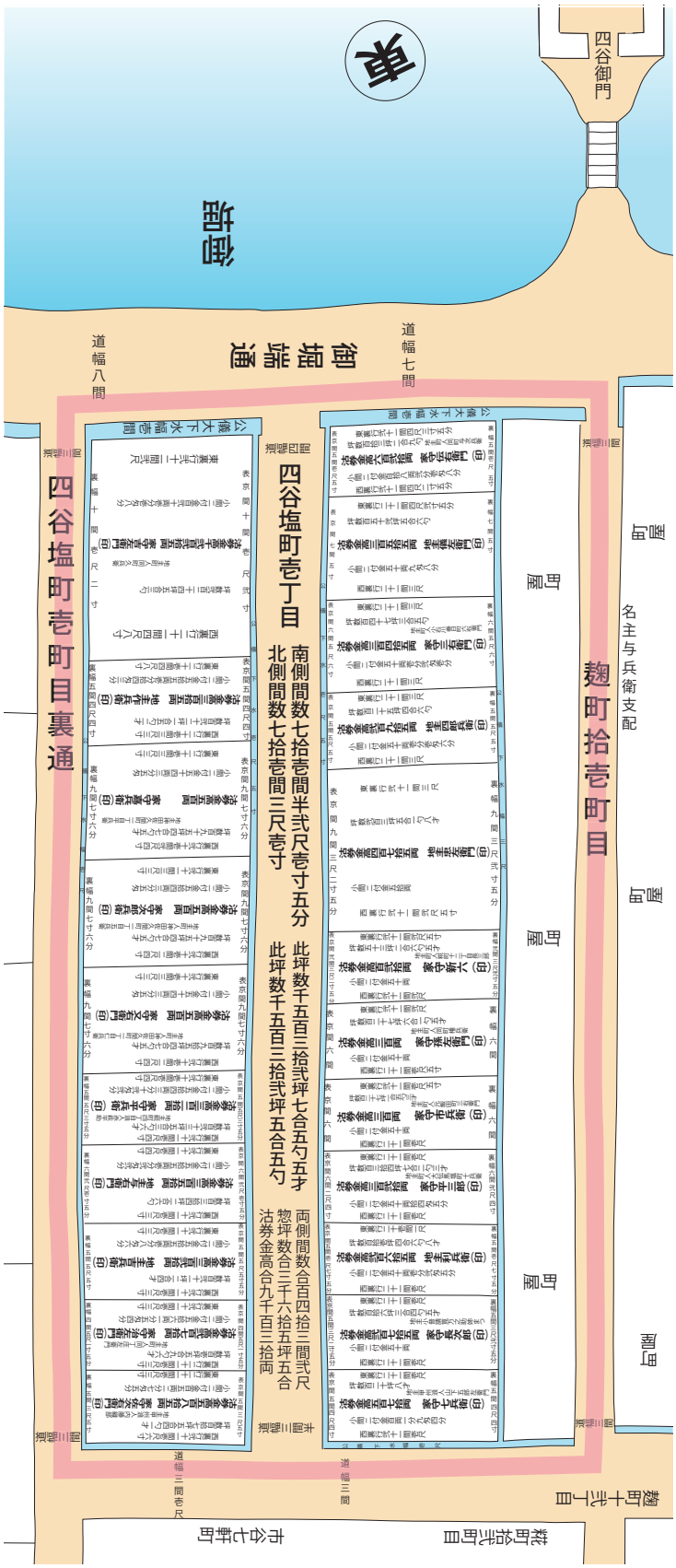
1　新宿区四谷一丁目遺跡（6 次）の位置

「尾張屋板江戸切絵図　四ツ谷絵図」安政 4 年（1857）より作成
江戸東京博物館所蔵
赤枠内は調査範囲を示す。
枠内左上の「千葉元昌」（町医）の名が記された一角も四谷塩町一丁目町屋敷に含まれる。



2　四谷塩町一丁目の路面下のようす

道路は数度改修されている。むき出しの地面であった路面はのちに砂利敷きで舗装され、両脇の公儀下水（側溝）は幕末から明治頃、木組みから石組みに造り替えられる（表紙写真では道路跡は調査途中の状況で、幕末～明治期の道路面がみえる）。道路中央に暗渠構造の木樋が埋められ、玉川上水から町まで水が供給されていた。驚くことに、江戸中期までは道端に地下室やごみ穴も設けられていた。



3 「四谷伝馬町・四谷塩町沽券絵図」（読み下し・部分）

馬込家文書　延享元年（1744年）　江戸東京博物館所蔵図より作成

大伝馬町名主の馬込勘解由が管轄する四谷地域の沽券絵図から、四谷塩町一丁目付近を抜粋（赤枠は6次調査地点のおよその範囲を示す）。各土地の地主・家守などの所有・管理者、面積や売買金額など、江戸中期の土地利用の状況がわかる。各地面の範囲は、遺跡から推定される地割にほぼ整合する。

4 色絵金銀彩山水文皿

磁器　肥前 有田　17世紀中葉　径22cm

金・銀・赤で上絵付を施した

古手の色絵製品

5 工具類

17世紀中葉～18世紀

小刀2点・木槌・鍬先・掛矢

【写真左から】

6 木偶人形頭

江戸時代

7 食材が記された墨書遺物

17世紀中葉～18世紀

◆曲物容器蓋　1:「遠州あらい / かつほのたゝき / なにや次五兵衛」（カツオのたたき＝塩辛）

2:「さん志やう / 山芏入」（山椒）

3：「進上 / 白砂糖 / 一曲」

4:「志ゆんけいミそ」（味噌）

5:「醤 / 愛宕山 / 金剛院」（嘗めもの［発酵食］）

6：「納豆 / 妙行寺」（寺納豆）

◆樽蓋　7:「(こう乃?) 印（花押）/ 御香物 / 守口漬百本入 / 大坂南 久太良町 仁和寺 / 善右衛門」（守口大根粕漬け）

◆荷札　8:「鮒二拾枚」、9:「のしあわび五けロ」

各地から江戸・四谷のまちにもたらされた品々。店で扱っていた商品も含むのであろう。

Ⅱ．江戸・東京の地下式麹室 —地下で育まれた麹づくり—

麹室は、酒や味噌に用いる麹づくりの施設で、江戸および近郊では地下式の麹室が多く発見されています。

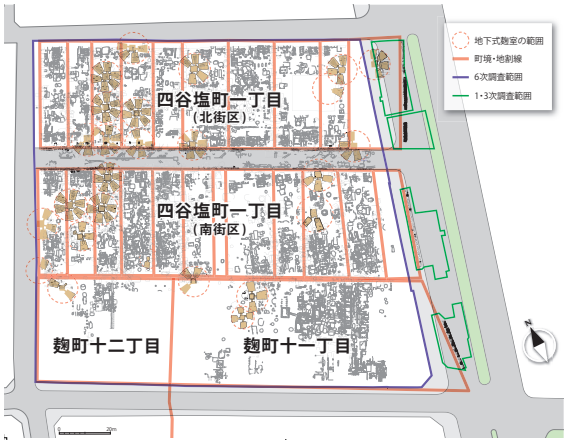
今回の調査では、３つの町屋敷あわせて 26 群約 100 室も発見！　町屋起立前後の寛永期（1624-45）には麹室が築かれ始め、17 世紀中～後葉をピークに 17 世紀末～ 18 世紀初頭には姿を消します。

1702 年（元禄 15）の『国花萬葉記』などの地誌から麹町十一丁目に〝麹屋〟の存在が知られ、また幕末から明治初頭の「四谷塩町一丁目人別書上」には「味噌渡世」を生業とする地主が記されています。今回見つかった麹室は、史料の記述を半世紀以上も遡り、江戸前期から四谷地域で大規模な麹づくりが行われていたことを物語っています。

四谷の麹は何に利用されたのでしょう？　麹室の中から出土したわけではありませんが、麹町十一丁目町屋敷側のごみ穴からの「味噌札」（21）の発見から、味噌との関わりが想定されるかも知れません。

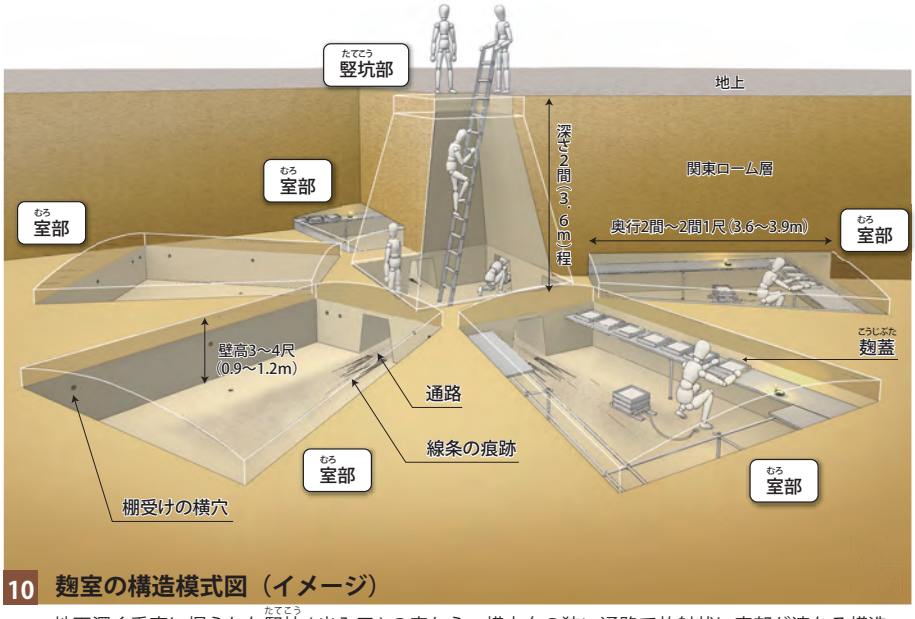
8　四谷一丁目遺跡の地下式麹室

①区麹室群　17 世紀中葉頃
室部の天井をすべて削りとった状態。発見された麹室の大半は隣合った麹室どうしが重ならないように計画的に配されている。



9　地下式麹室の分布

麹室はすべて同時に稼働していたわけではないが、四谷界隈が江戸前期の都市江戸の消費の一旦を担う一大生産拠点であった様子が窺えよう。

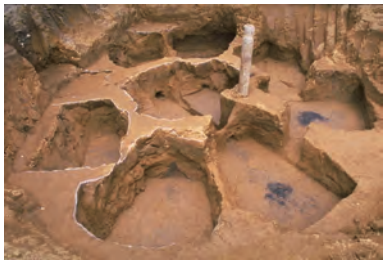


10　麹室の構造模式図（イメージ）

地下深く垂直に掘られた竪坑（出入口）の底から、横方向の狭い通路で放射状に室部が連なる構造。最大６室。壁面に沿って竹材で組まれた棚に麹蓋を並べ麹菌を繁殖していたのであろう。

11　麹室発掘風景

室部の天井を取り除いた状態。奥側が竪坑、手前側が室部。竪坑から各室部への通路は、屈まないと通れないほど狭い。



古泉弘『江戸の穴』（柏書房 1990年）をもとに作成

13
14
15
16
12

12 発掘された地下式麹室の分布

分布地域は遺跡・史料ともに重なり、本郷・湯島、四谷・麹町、芝の台地上に展開した。麹室室部の形態は、年代が下るとともに長大化する傾向があった。

13 江戸初期の麹室

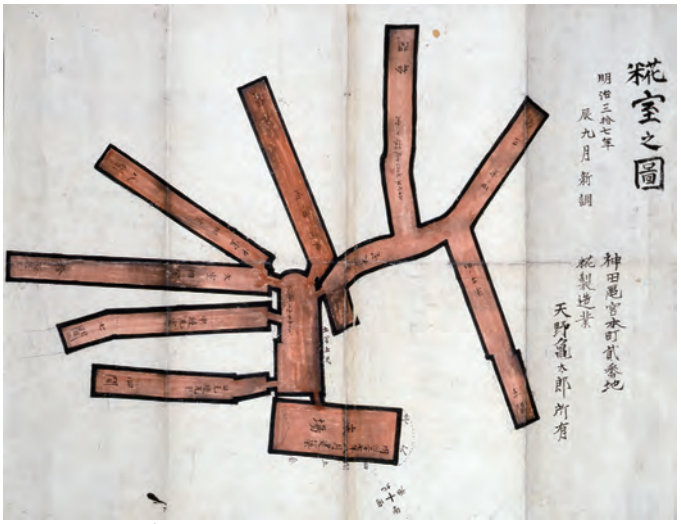
尾張藩麹町邸跡 2 次　17 世紀前葉
千代田区立教育委員会提供

14 江戸中期の麹室

文京区本郷台遺跡群（東京大学構内遺跡 伊藤国際学術研究センター地点）　18 世紀前葉
東京大学埋蔵文化財調査室提供

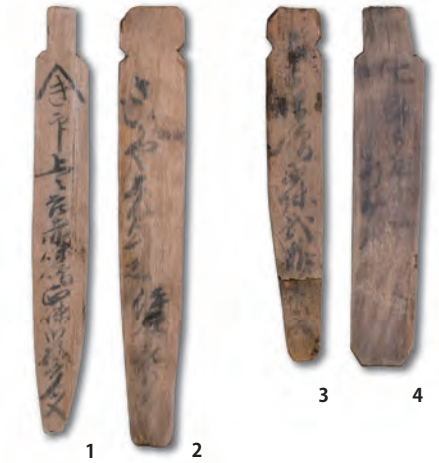
15 16 江戸後期の麹室と竈（かまど）

仙台坂遺跡　18 世紀後葉以降
品川区教育委員会提供
「仙台味噌屋敷」とも呼ばれた伊達（だて）家下屋敷で発掘された麹室と味噌醸造に関連する石組みの竈。室部は奥行の長い長方形の形状で『安政見聞誌（あんせいけんもんし）』（本誌非掲載）の挿絵（さしえ）によく似た構造である。



17 糀室之図（こうじむろのず）

1904 年 (明治 37)　江戸東京博物館所蔵
神田明神前の甘酒店「天野屋」の糀 (麹) 室見取り図。築造時期は江戸後期にまで遡るとされる。大半は埋め戻されたが現在も一部に残る室で麹づくりが行われている。麹室は千代田区指定有形文化財（非公開）。



18 19 麹室から出土した陶磁器類

18：四谷塩町一丁目町屋敷（北街区：①-487 号）。左上 2 点は鞴（ふいご）の羽口（はぐち）。
19：同（南街区：③-150 号）
新宿区四谷一丁目遺跡　17 世紀前～中葉

22 ズリ（麹蓋の運搬具）

L47.0 × W10.2 × H5.6cm
天野屋 5 代目当主が再現制作　個人蔵

20 江戸遺跡初発見の麹蓋

L61.8 × W30.8 × H2.7cm
新宿区四谷一丁目遺跡　17 世紀中葉
麹町十二丁目町屋敷の麹室竪坑床面から数点出土（表紙右下写真参照）

23 天野屋で使われていた麹蓋

L41.0 × W19.4 × H3.2cm
昭和　江戸東京博物館所蔵

21 味噌（みそ）荷札

1・2：表「(ヤマ) き印 / 上々（じょうじょう）吉赤（よし）味噌 / 正味弐拾貫メ入」
　　裏「さいかや彦右衛門殿 / 伊藤喜左衛門」
3・4：表「上々味噌正味弐拾〆目入」
　　裏「七十四 / 名古屋堀端町 / あみ [」
新宿区四谷一丁目遺跡
17 世紀末～ 18 世紀初頭

【協力】独立行政法人都市再生機構　東京都教育委員会　新宿区教育委員会　新宿区立新宿歴史博物館　品川区教育委員会　品川歴史館
千代田区教育委員会　千代田区立日比谷図書文化館　東京大学埋蔵文化財調査室　早稲田大学図書館　株式会社天野屋
浅岡清明　岩淵令治　金行信輔　後藤宏樹　小林照子　冨川武史　成瀬晃司　堀内秀樹　水本和美　美濃部達也　（敬称略・順不同）

発掘された日本列島 2017 地域展 を開催中です！

地域展示：「“ 速報 ” 四谷一丁目遺跡 ― 麹生産にみる江戸・東京 ―」
期　　間：平成 29 年 6 月 3 日 (土) ～ 7 月 23 日 (日)
日　　時：午前 9 時 30 分～午後 5 時 30 分
　　(土曜日は午後 7 時 30 分まで、7 月 21 日 (金) は午後 9 時まで)
休 館 日：毎週月曜日 (月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日休館)
場　　所：江戸東京博物館　常設展示室 5 階 5F 企画展示室 前

「発掘された日本列島 2017」展の開催に合わせて、東京都埋蔵文化財センターでは江戸東京博物館とともに地域展「“ 速報 ” 四谷一丁目遺跡―麹生産にみる江戸・東京―」を企画・展示しています。また、会期中には当センター職員が地域展示に関連したミュージアムトークも行います。皆さまのご来場をお待ちしております。

関連行事　【ミュージアムトーク（地域展見どころ解説）】
開催日時：7 月 7 日・14 日・21 日 (各金曜日) 午後 4 時から 30 分程度

速報！ 東京都埋蔵文化財センターの 楽しい体験イベント 2017春

今年度もまた新しい年度が4月から始まりました。今回は、当センター最大規模のイベント「縄文ワクワク体験まつり」（5月3・4日開催）について紹介します！

ゴールデンウィークの恒例行事になった「縄文ワクワク体験まつり」、今年で８回目の開催です。「縄文人にチャレンジ」をテーマにしたこのイベントでは、狩りの擬似体験ができる「弓矢」や縄文人も食べていたオニグルミを使った「クルミ割り」、縄文服を試着できる「縄文コレクション」、舞いぎりでの「火おこし」や「勾玉作り」など、いろいろな体験することができます。そして、今年は新たな企画として「縄文発掘体験」を新設しました。

当日は受付で案内図とともに、ドングリが渡されます。このドングリ、ただのドングリではありません。このイベントだけで使用可能な仮想通貨「ドングリコイン」です。体験をする際、１回につきドングリひとつを渡す仕組みになってます。

両日とも各コーナーのドングリコインの数を集計したところ、体験者が多かったベスト３は１位「クルミ割り」、２位「弓矢」、３位「火おこし」という結果になりました。「クルミ割り」は、遺跡庭園入ってすぐの場所に体験コーナーを設けている点が有利に働いたのかもしれません。「弓矢」と「火おこし」は、定番の人気コーナーといったところでしょうか。

新設した「縄文発掘体験」は予想以上の人気ぶりで、開始してまもなく体験を待つ行列ができていました。そのため、整理券を配布する方式に急遽変更しました。発掘する場所は遺跡庭園の一番奥にある竪穴（たてあな）住居の模型です。住居内を覆土（ふくど）となる砂で埋め、レプリカの土器や石器を埋め込みました。発掘体験をする前に使う道具と発掘方法のレクチャーを受けたら、いよいよ発掘に挑戦です。体験した子供たちは、まるで実際に遺跡の調査を行なっているかのように土器を掘り出していました。ここでの発掘体験が将来、考古学や歴史に関心を持つきっかけになれば、こちらとしては嬉しい限りです。

暑いくらいの晴天に恵まれた今年は、２日間で1,700人を超える数の人が参加しました。この人数は、縄文ワクワク体験まつり史上最多人数です！その大部分が家族連れでしたが、中には友達どうしで訪れた小学生の姿もみられました。また、小学生の中には、４月の社会科見学で当センターに来たという小学生もいて、見学時に案内した職員と「また来たよ～！」などと言葉を交わす場面が何度もみられました。

（小西絵美）

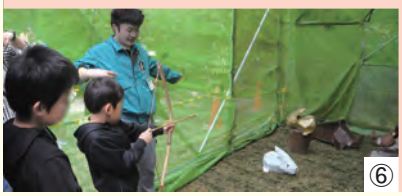
①

②

③

④

⑤


⑥

⑦

⑧

①縄文発掘体験　②縄文コレクション　③クルミ割り体験　④縄文アート（縄文土器の文様を写し取る）
⑤ドングリアート（ドングリに自由に絵を描く）　⑥弓矢体験　⑦・⑧火おこし体験

平成 29 年度企画展示解説 1

『東京発掘 江戸っ子のくらしと文化』 北斎が見た（？）江戸の土器

江戸の日常生活には、たくさんの素焼きの土器が使われていました。今回の展示でご覧いただいているものだけでも、各種灯火具に火鉢などの暖房具、七厘や焙烙といった調理具など、枚挙に暇がありません。

江戸時代後期の浮世絵師、葛飾北斎（宝暦 10～嘉永２年／ 1760 ～ 1849 年）の『北斎漫画』には、それらの土器が克明に描かれています（図１）。文化 12（1815）年刊の二編に収められたその絵は、土器のみならず陶磁器も含めたやきもの類をランダムに描いたもので、北斎が活躍した 18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて、江戸の巷で使われていたものが描かれていると考えられます。

図１　葛飾北斎『北斎漫画』二編より　すみだ北斎美術館蔵
①②…手焙り ③…十能 ④…風口 ⑤…灯火具（油皿と台付きの受皿） ⑥…焙烙 ⑦…あんか ⑧…かわらけ ⑨…焜炉 ⑩…胡麻炒り ⑪…火消壺 ⑫…風炉 ⑬…七厘 ⑭…船かまど

それぞれを発掘された資料と比べてみると、見事に特徴が捉えられていることに驚かされるのですが、一つだけ、江戸の土器とするには違和感のあるものがあります。それは中央上寄りに描かれている焙烙です。実際にはこのような形の焙烙は出土していないのです。

画中の焙烙の底には三ヶ所に取手（内耳といいます）が付けられています。焙烙は元来囲炉裏の上に吊るして使うものだったため、内耳が付けられていました。しかし、囲炉裏のない都市江戸の生活の中で、竈や七厘に懸けて使われるようになったため、用無しとなった内耳は 18 世紀半ば頃までにはなくなってしまいます（図２）。

図2　内耳のない焙烙　尾張藩上屋敷跡遺跡出土（展示中）

また、囲炉裏が生活の中心だった近郊農村では内耳のある焙烙が使われていましたが、その形状や位置は画中のものとは全く違います（図３）。

図3　近郊農村の焙烙　多摩ニュータウン№. 782 遺跡出土

つまり、北斎は焙烙を描くにあたって、自分がいつも目にしているものではない、想像上の焙烙を念頭に置いていたということになります。

何故、北斎は見たことのないものを描いたのか、謎というほかありませんが、恐らくは内耳という風変わりな部位のある焙烙については聞き知っていたのでしょう。そして、その造形への興味や囲炉裏の上に吊り下げるという画趣に刺激され、敢えて、見たことのない「内耳のある焙烙」を描いたのかもしれません。　（両角まり）

たまのよこやま 109　2017 年 6 月 15 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/